

実習♡ブック

～学生と保育者の「園♡縁結び」～

(一社)京都府保育協会　(公社)京都市保育園連盟
京都保育士養成研究会

目　次

１．実習生のみなさんへ、保育実習への誘い（いざな）

２．実習前の準備をしよう

（ア）保育実習の目的
（イ）実習オリエンテーション

３．実習中（前半）のポイント

（ア）実習にあたって
（イ）実習のポイントⅠ
（ウ）実習日誌
（エ）学校・養成校からの訪問指導

４．実習中（後半）のポイント
（ア）実習のポイントⅡ
（イ）責任実習及び部分実習
（ウ）実習の最後に

５．養成校における事後指導

６．実践編～子どもたちとのすてきな出会い～（写真集）

７．資料
- 全国保育士会倫理綱領
- 事故防止ガイドライン

８．あとがき・・・保育への思いをハートブックに込めて

※ 実習先の保育所（園）、幼保連携型認定こども園の表記は「園」としています。
※ 保育士養成機関（専門学校・短期大学・大学）の表記は「養成校」としています。

1. 実習生のみなさんへ、保育実習への誘い（いざな）

ようこそ保育実習へ。初めての体験、慣れない体験を前にドキドキしていることでしょう。

あなたが決めて、踏み出した一歩は、かけがえのない経験を創り出すとても意味のある一歩です。仕事には責任がつきものです。それゆえに面白さもやりがいもあります。「保育」の仕事が人気のある理由は、その責任の背景に**「喜び」や「学び」がいっぱい**あるからです。

当初は誰しも緊張や不安を感じますが、馴染むにつれどんどん面白くなり最終日には子どもや園との別れが寂しくて涙、なんてことも珍しくありません。**涙するほどに感動する仕事って素敵です**。

この「ハートブック」では、実習生の一人一人が恵まれたチャンスを活かせるよう実習のプログラムに沿ってポイントをわかりやすく紹介していきます。

養成校の先生方や園の先輩方からの応援メッセージや写真で観るアドバイス集も盛り込みましたので、ぜひ励みにしてくださいね。

保育では、**何より人間性が大切です**。専門性は豊かな人間性の上に積み上げられていきます。**保育は人間性に磨きをかけるうってつけの仕事**です。

さあ、心軽やかに保育実習の扉をノックしましょう。子どもたちとの素敵な出会いが待っています。

応援メッセージ

≪養成校の先生から≫

皆さんは、なぜ保育者になりたいと思ったのでしょうか？また、どんな保育者になりたいと思っているのでしょうか？実習は、皆さんがプロの保育者として保育の本番に向かう前に、もう一度“自分自身”と向き合うことのできる貴重な機会です。保育の現場で子ども達とたくさん関わりながら、子どもが好きという気持ち、こんな保育がしたいという理想、それを実現するために自分にできること、これから身に付けるべきことをぜひ確認してきて下さい。

≪園の先生から≫

「保育の魅力、醍醐味、やりがいや面白さ」を実感してもらえるよう真心をもって実習指導にあたります。

実習生の学びや成長は、指導に関わる私達の成長の機会でもあります。踏み入るほどに面白さが増す保育の奥深い世界を心軽やかに味わってみてください。課題の一つ一つを一緒に乗り越えながら、より良い保育実習をつくりましょう。

2. 実習前の準備をしましょう

（ア）保育実習の目的・・・養成校での実習事前指導等をもとに次の項目を整理・確認しておきましょう。役に立ちます。

① あなたの実習のねらいとその理由を書きましょう。＜実習の目的＞

② ねらいを達成するために体験したいことについて書きましょう。＜達成の方法＞

③ 園の情報を調べて、質問等、尋ねたいことを書きましょう。＜積極的態度＞

④ 関わりたい子どもの年齢は何歳くらいですか、理由とともに書きましょう。

⑤ その他、実習中にやってみたいことがあれば書きましょう。

⑥ 交通手段、社会人としてのマナーや守秘義務について確認しておきましょう。

- 交通手段⇒公共の交通機関もしくは徒歩・自転車
- 服　　装⇒黒・紺・グレー等のスーツ
- 持 ち 物⇒筆記具・メモ帳・記録用紙・実習テーマ
- 守秘義務⇒園児・保護者・家庭・保育者・その他の職員・地域の方々の個人情報やプライバシーを守る義務については法律で定められています。写真・文書・メール・記録・USB メモリ等々のいずれの媒体でも無断に持ち出してはいけません。特にインスタグラムやツイッターなどの SNS への投稿は厳禁です。

（イ）実習オリエンテーション・・・挨拶及びオリエンテーションの日程調整

実習先の園名は、公立の場合は市町村名から、私立の場合は法人名から書きましょう。
公立（　　市・町立　　）です。
私立（社会福祉法人　　）です。
つぎに施設の種別です。保育実習は、保育所及び幼保連携型認定こども園、保育所型認定こども園で行われます。つぎの表を参考に特徴を確認しておきましょう。

	保育所	幼保連携型認定こども園	保育所型認定こども園
法的役割	児童福祉法に基づく児童福祉施設	児童福祉法に基づく児童福祉施設 認定こども園法に基づき、学校としても位置付け	児童福祉法に基づく児童福祉施設
認可	都道府県及び指定都市	都道府県及び指定都市	保育所認可・・・都道府県及び指定都市 こども園認可・・・都道府県
入所児童	必須：２号、３号（いずれかのみでも可）	必須：２号 任意：１号、３号	必須：１号、２号 任意：３号
	１号認定：３歳以上、幼稚園同様、定期的な保育の必要がない ２号認定：３歳以上、保護者の就労や疾病等により保育の必要があると認定 ３号認定：３歳未満、保護者の就労や疾病等により保育の必要があると認定		
園長資格	なし 運営費上の基準は児童福祉事業に２年以上従事した者（同等以上の能力を有すると認められる者）	幼稚園教諭免許状と保育資格の両方を有する者で、一定の職に５年以上従事していること（同様の能力を有すると認められる者）	なし 運営費上の基準は児童福祉事業に２年以上従事した者（同等以上の能力を有すると認められる者）
従事者	保育士資格	幼稚園教諭免許状と保育士資格の両方を有する職員	幼稚園教諭免許と保育士資格の併有者が望ましいが、保育士でも可（学級担任は原則、要幼稚園教諭免許状）
施設基準	保育所基準	園舎の面積は、幼稚園基準と保育所基準（満３歳未満児に限る）を合計した面積が必要	園舎の面積は、幼稚園基準が必要

それでは、園へ挨拶の電話を入れましょう。大切なのは第一印象です。
電話は相手が見えないだけに、はっきりと丁寧な言葉遣いを心がけましょう。
併せて、実習オリエンテーションの日程調整をしましょう。

① わたしは、養成校名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　、＿＿＿回生の

② 氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿と申します。

③ この度は保育実習を受け入れていただき誠にありがとうございます。

④ 期間⇒＿＿＿月＿＿＿日から＿＿＿月＿＿＿日までお世話になります。
よろしくお願いいたします。

⑤　本日は実習にあたり、オリエンテーションの日程調整をお願いしたいのですが、今よろしいでしょうか。（相手の状況への配慮）

⑥　可能な場合⇒ありがとうございます。よろしくお願いいたします。
（打ち合わせ内容は次の欄に記録し、必要事項を抑えましょう。）

オリエンテーションの日時⇒＿＿＿＿＿＿　場所⇒＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

アクセス方法⇒＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

持ち物⇒＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

その他の必要事項⇒＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

⑦　不可能な場合⇒わかりました、改めてお電話をさせていただきたいと思うのですが、ご都合のよい日時、時間等がありましたら教えていただけますでしょうか。
⑧　わかりました。では、改めて＿＿＿＿＿頃にお電話をさせていただきます。
⑨　電話を切る際⇒「本日はお忙しい中、ありがとうございました。今後ともご指導のほど、よろしくお願いいたします。」との言葉を添えた上で、相手より後で⇒「いち、にい、さん、」と数を数えてから切りましょう。

応援メッセージ

≪養成校の先生から≫

　オリエンテーションの日程調整の電話をする場合、事前に自分の都合の良い日を考えておきましょう。特に、複数で一緒に伺う場合はお互いの日程を事前に調整し、第１希望、第２希望‥と決めておくのが良いですよ。当日は実習先の先生から、実習で必要なことを教えていただきますが、同時に自分たちが聞きたいことも考えておきましょう。「こんなことを聞くのは恥ずかしいかな」などと思わず、何でも聞くようにしましょう。きっと丁寧に答えていただけると思います。

≪園の先生から≫

　電話は関係づくりの第一歩です。実習生からの電話は自分の実習生時代と重ね、応援したい気持ちでいっぱいになります。
　緊張すると思いますが、頑張って明るく元気な声をだし、はっきりと話してください。電話の声を聞いて、どんな学生さんかなあと想像します。そして、会うのが楽しみになります。言い間違えなどは、気にする必要はありません。
元気が一番！！
やる気が一番！！
　お電話を楽しみにお待ちしています。

★実習オリエンテーションの目的★

オリエンテーションでは実際に園へ訪問します。目的は、園の理念や実習方針、プログラムと内容、実習生の活動等についての理解を深め、実習イメージをつかむことです。スムーズに実習を迎えたり意義深い実習にしたりするための助走の機会と言えるでしょう。園の案内では、子どもたちとの出会いや園の環境・雰囲気に触れることができます。心を開いて味わいましょう。

★実習オリエンテーション前に自己チェック☑　しましょう★

園に伝えたいことは（　）に書いておきましょう

☐　健康、体調は良好・（　　）
※食物アレルギーや動物アレルギー等・その他配慮事項については、きちんと伝えましょう。

☐　姿勢、情緒は良好・（　　）

☐　身だしなみは整え済み・（髪・爪・厚化粧・服装・アクセサリー　　）

☐　持ち物は確認済み・（　　）
※実習関連の書類はクリアファイルや封筒に入れ、整えておきましょう。

☐　養成校からの書類・実習テーマは確認済み・（　　）

では、いってらっしゃい！！

★インターフォンを鳴らします★

インターフォンを鳴らす前に園の近隣や園舎周りの様子・環境を見ておくことをお勧めします。
相手の声が聞こえたら自己紹介を始めましょう。

① 本日、実習オリエンテーションをお願いしておりました養成校名＿＿＿＿＿＿＿＿＿回生の氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿と申します。

② 電気式オートロックが最近の主流です。開錠してもらいます。
直接出会った際には「こんにちは、よろしくお願いします」と再度挨拶します。
案内に従い、オリエンテーションが行われる場所へ移動・入室します。

③ 案内の方とオリエンテーションの担当者は異なる場合があります。担当の方へ自己紹介します。つづいて、「こちらは実習関連の書類になります。今お渡ししてよろしいでしょうか。」などと、あらかじめ整えていた実習関連の書類を手渡すタイミングを確認します。その後、担当者の指示に従い手渡しましょう。

④　担当の方の氏名、職名を覚えましょう。氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿です。
職名は（園長、副園長、主任・主幹保育教諭・指導保育教諭・担当保育士・保育教諭、その他）です。
正しい漢字で表記しましょう。わからない場合は尋ねましょう。口頭で分からないときは実際に書いてもらうなど、間違いがないようにしましょう。

◇自己紹介後は担当の方の進行に沿ってオリエンテーションに参加します。
園によっては実習リーフレット等を配布される場合があります。このページへ貼付、挟み込む等、確認しやすいように保存しておきましょう。

⑤　保育の理念や方針、心構え、留意事項等、説明を受けた内容や感想を書いておきましょう。

⑥　実習記録の書き方や指導案の書き方、子どもへの関わり、体験実習の持ち方等について書いておきましょう。

⑦　配属先、実習時間、持ち物、服装、身だしなみ等、事務的な打ち合わせ内容について書いておきましょう。

⑧　子どもの表情・遊びの足跡、関心を持った環境、保護者や地域に向けての情報提供等々、案内を受けての印象や気づき、感想を書いておきましょう。

⑨その他の留意事項について確認しましょう。

応援メッセージ

≪養成校の先生から≫

実習園の先生方とお話をして、園の雰囲気を感じ取れましたか。
お尋ねしたいことは、事前にしっかりとまとめておきましょう。先生方は、あなたの積極性を期待しておられます。解らないことはそのままにせず、解決していきましょう。
明るい笑顔と、元気な挨拶を忘れず、実習に臨んでくださいね。応援していますよ。

≪園の先生から≫

実習に対する実感が湧いてきましたか。園を見て、雰囲気に触れて、保育の息吹を少しでも感じてもらえたとしたら嬉しい限りです。第一印象はぜひ教えてくださいね。また、聞き忘れたこと、オリエンテーション後に質問したくなったことがあったら、メモにして初日に持ってきてください。

♡実習に役立つ絵本と保育と言葉掛け・語り掛け・・・By ファンタ爺

「おロのトンネルあーんとあけてポッポ～」、「うんちバイバーイ」など、絵本の世界には子どもが喜ぶ**遊び心に満ちた言葉掛けや語り掛け**のヒントがいっぱい詰まっています。一つの楽しい言葉から子どもの笑顔が生まれるって、楽しいよ～。

3. 実習中　前半のポイント

（ア）実習にあたって

緊張いっぱい！でも当たり前！！園の**保育者**たちもみんな実習生でした。緊張とほどよく付き合いながら、かけがえのない体験を味わいましょう。

★実習前に自己チェック☑ しましょう★

☐ 体調は OK？
※具合の良くない時は、状態や症状、出席の有無について園に連絡しましょう。

☐ 表情及び心の準備は OK？
※鏡を見てチェックするのもいいでしょう。また、マスク等を着用する際は、園に確認しましょう。

☐ オリエンテーションで確認した身だしなみは OK？
※髪・爪・厚化粧・服装・アクセサリー・髭など園によって異なります。

☐ 持ち物は OK？（　　）
※実習簿や筆記用具など毎日必携するもの、指導案や保育の準備物など、その日に必要なものを区分けして、メモしておくといいでしょう。

☐ 守秘義務の遵守は OK？（噂・おしゃべり・SNS・写真　　）

☐ 養成校（学校）からの書類は OK？（実習個人票・成績表　　）

※園に伝えたいことがある場合は（　）に書いておきましょう。

（　　）

（イ）実習のポイントⅠ

右も左もわからない実習当初。保育者はそんなあなたを温かく見守っていきます。子どもと一緒に楽しみ、関係を築いていく喜びをぜひ味わってください。関わるほどに子どももあなたに親しみを感じてくれるようになるでしょう。また、保育の場面ごとに種々の仕事があります。慌てず急がず、一つずつ丁寧に身に付けていきましょう。

①【挨拶はコミュニケーション・対話の糸口⇒**対話する基本姿勢の獲得**】

- 子どもはもとより、保育者、保護者など出会う人には笑顔で挨拶しましょう。
- 通いの途中で出会う地域の人へも挨拶すると、なお良いでしょう。
- 子どもの名前を覚え、顔と名前が一致するよう努めましょう。名前を尋ねるやり取りも楽しい時間です。また、低年齢の子どもへは、身につけているものや持ち物に書かれた名前などをヒントにするといいでしょう。

- 緊張や引っ込み思案、人見知り等で挨拶できずにいる子どもへは、子どものペースに合わせて無理強いせず、温かく見守りましょう。
- 終業時には「今日も一日ありがとうございました。明日もよろしくお願いします。お先に失礼します。」と挨拶しましょう。

②【安心を与えましょう⇒養護：情緒の安定に努める基本姿勢の獲得】

- 泣いている子どもや困っている子どもがいたら、声をかけてあげましょう。
- ありのままの姿を「受容」し、優しくスキンシップするなど、やわらかい雰囲気や笑顔で子ども達に関わりましょう。
  ※スキンシップは体温や健康状態を把握する機会にもなります。
- 子どもの気持ちや活動を見守るために、子ども目線の姿勢をとり、子どもに背を向けないようにしましょう。
- 子どもの活動の全体が見届けられるように、より多くの子どもを視野に入れるよう位置取りを工夫しましょう。

③【安全を守りましょう⇒養護：生命の保持に努める基本姿勢の獲得】

- 子どもの活動、活動空間、関わる環境等に危険なものがないか、またかみつき・ひっかき等の危険なことがないかチェックし、見守りましょう。
- 子どもの健康や体調管理に留意しましょう。
- けがや事故を発見したり、子どもから体調不良等の訴えがあったりした場合は、速やかに保育者に報告しましょう。

④【一日の流れを覚えましょう⇒一日の仕事の理解と環境構成への参画】

- 保育者の姿やデイリープログラムから「どんな場面で何をしているか」、「今何をしようとしているか」の理解に努め、協力していきましょう。
- 食事や昼寝の準備・後片付けなど、一つ一つの活動の流れを把握・整理しながら、一日の仕事内容や段取りを身につけていきましょう。
- 分からないことは自ら質問しましょう。もし、担当保育者が手を取られている場合は、メモを活用し、後で確認しましょう。
- 頼まれたことが終わったら報告し、次にする内容を確認しましょう。

⑤【配属先の保育者を観察し、実践しましょう⇒保育のねらいと方法についての理解と子どもへの関わり】

- 食事・睡眠・排泄・着脱・衛生・安全等の生活場面のそれぞれに保育のねらいがあることを理解しましょう。配属先の保育者の子どもへの関わりや行動を見習い、模倣する等、理由を考え、理解し、自分でもやってみましょう。
- 子どもの特性や個性を愛し、一人一人に応じた関わりや機嫌、状況に応じた関わりを工夫し、身につけていきましょう。
- 「子どものその時の思い」や「子どものありのままの心持ち」や「今に至るまでの思い」に耳を傾け、寄り添い、受容・共感に努めましょう。

⑥【環境整備の仕事を進んでしましょう⇒**園生活の成り立ちへの理解と参画**】

- 掃除・洗濯・整理整頓等の業務は保育ならではの生活に根差した営みであり、子どもの生きる力を育む大切な教育の機会です。進んで行いましょう。
- 時間と目標を設定しましょう。
- 自分の身のこなしは保育環境の一つです。「子どものモデルであること」を意識し、少しずつ環境整備の仕事のやり方を身に付けていきましょう。

⑦【子どもの楽しんでいることを発見しましょう⇒**子どもの興味・関心、主体性を活かす基本姿勢の獲得**】

- 遊びの場面では、「遊んであげる」のではなく、子どもの姿や子どもの目線を観察し、活動に合わせて「同じように動いたり、声を出したり、眺めたり、触ったり、一緒に体験」しましょう。
- 実習生も楽しみましょう。保育者が楽しいと子どもも楽しいのです。
- 子どもの興味や関心の対象を見つけると実習が一層楽しくなります。
- なぜ興味や関心を抱くのか理由について考察しましょう。
- 保育者の関わりを積極的に取り入れてみましょう。

⑧【子どもの要求や表現に応え、やりとりを持続的に楽しみましょう⇒**応答的態度と対話的態度の獲得**】

- 子どもの行動・表現・言葉等を「キャッチ」して共感し、子どもにかえしましょう。
- 「お茶」だけでなく「お茶がほしいです。」「お茶ください。」等、単語に対しての返しは一語文に要求の動詞を加えると言葉遣いの学びになります。
- 応答の際は、乳児や低年齢の子どもへは表情や行動に声や言葉を添えましょう。また、子どもと同じ言葉をオウム返しするのもいいでしょう。
- 子ども主体⇔保育者主体のリズムをつかみましょう。子どもに任せる、預ける、待つ、間を取る等を場面に応じて使い分けましょう。

⑨【保育環境の意図の理解に努めましょう⇒**環境を通して行う保育の習得**】

- 遊びの環境構成には一つ一つにねらいや意図があります。
- 子どもがそれらにどんなふうに関わるか、関わっていくかに着眼しましょう。
- 積極的な見守りから、環境に込められた保育者の意図やねらいを受容共感し、くみ取りましょう。

（ウ）実習日誌

保育実践は、長期的な指導計画である月案や短期的指導計画である週日案等に基づいて、日々の活動を行います。実習日誌では、実践を振り返り、より良い保育を目指

して考察する態度を養います。初めのうちは難しいと感じるかもしれませんが、「より良い保育を実現する」という目的を理解し、楽しみながら書きましょう。また、園ごとに書き方の特徴や工夫があります。指導を参考に書きましょう。

- 実習日誌では自らの実践を振り返ります。
- うまくいったことを活かし、課題を越える工夫や試行錯誤を楽しみましょう。
- 実習記録は事実・感想・気づき・ステップアップ等、段階式に書きましょう
- デイリープログラムや事実を記録する段階を越えたら、一日を終えて記憶や印象に残っていることをテーマに書きます。例えば・・・

今日、朝保育室へ行くとAちゃんが走り寄ってきて私に抱きついてきました。（事実）
実習生の私にでも甘えてきてくれて嬉しかったです。（感想）
子どもの眼から見れば、ときに実習生であっても頼りになることを教えられた気がしました。（気づき）
明日からは、少しでも子どもの心の支えになれるよう、一人一人の子どもの様子を積極的に見守り、安心につながる関わりについて工夫していきたいです。（ステップアップ）

- 何を書くか、テーマを絞り込みましょう。　（楽しかったこと、嬉しかったこと、迷ったこと、難しかったこと、学んだこと）
- 対象は〈子ども単独・同年齢の子ども同士・異年齢の子ども同士・子どもと実習生の関わり・子どもと保育者との関わり（　　）〉
- 場面は〈自由遊び（朝・昼・夕）・設定保育・食事・排泄・衣服の着脱・睡眠・片付け〉
- その他（　　）

応援メッセージ

≪養成校の先生から≫

一番苦労される方が多いのは記録でしょうか。書くことがたくさんありすぎて、何をどのように書けば良いのか困ってしまいますね。実習生によく見られるのが、「今日は〇〇した。〇〇が嬉しかった。〇〇が困った」と、一日あったことを羅列的に書いてしまうことです。何がどのように嬉しかったのか（困ったのか）、人に読んでもらうことを意識し、読む側に状況がわかるように書きましょう。

◦一日毎に実習生の具体的な目標を設定しますので、その目標に注目して書く。
◦観察・部分実習などで、一番記憶や印象に残っていることから、何を学んだか、何が疑問に残ったか、こども達や保育者の具体的な姿を取り上げて書く。
◦書き言葉で書き、誤字・脱字に気を付けて、丁寧な字で書く。などを心がけてください。

≪園の先生から≫

子どもたちはとてもパワフルです。保育の実践は体力が必要ですので、規則正しい生活を心がけ、元気に明るく実習に臨みましょう。

実際に子どもと接してみると「思うようにできない」「うまくいかない」と悩むこともあるでしょう。始めはみんなそうです。実習ではうまくいくことより、経験することが大事です。わからないことは積極的に聞いてください。

子どもの姿や子どもと保育士とのやり取りを思い浮かべながら実習の記録を書くと、よい振り返りができます。書くことに悩んだら遠慮なく質問してください。

（エ）養成校からの訪問指導

実習園では、あなたの特性や個性、良いところ、頑張っているところを応援しながら、より良い実習へつなげていきたいと考えています。そこで、養成校の先生の訪問指導時には、これまでの実習の様子をお知らせします。

養成校の先生との面談で、率直な感想や気持ちを伝えてください。養成校の先生があなたの応援に訪れる機会です。積極的に活用しましょう。

★実習園が養成校の先生にお知らせする内容（例）★

「実習生の印象、意欲」「社会人としてのマナー」「子どもへの関わり」「保育士等とのコミュニケーション」「実習日誌の記述」「指導内容の理解と実践への反映状況」「掃除や洗濯、保育準備等への取り組み」「今後の課題」等

応援メッセージ

≪養成校の先生から≫

園の先生方は毎日多忙ですから、疑問をすぐに伝え、答えを得ることは難しいでしょう。疑問や不安は一人で抱え込まず、担当教員が訪問した際に、話してみましょう。また園の先生方から実習生への要望を担当教員が受けることもあります。いずれの場合にも、担当教員の指導を受けながら、自分の課題を毎日見つめ直し、前向きに実習に取り組んでいきましょう。

≪園の先生から≫

願うことはただ一つ、子どもたちの成長に関わりを持つことの素晴らしさを実習で体験してほしいのです。

０歳の赤ちゃんが懸命に生きる姿は感動的です。就学を前にした年長児たちは、活発で好奇心の塊です。

このハートブックに目を通して、実習に来てください。実習生だからって構える必要は全くありません。あなたのありのままの姿でどうぞ。

4. 実習中　後半のポイント

（ア）実習のポイントⅡ

実習にも徐々に慣れ、嫌がっていたおむつを交換させてくれたり、子どもからの関わりが増えたり等、子どもとの関係も随分深まってきたことでしょう。それらは実習前半の努力や頑張りの成果です。また、保育者の関わりや指導を見て、そのバリエーションの豊富さや子どもの様子、保育の場面ごとに関わりを使い分けていることにも気づいてきたのではないでしょうか。

後半ではさらに保育が面白くなるよう、ポイントを紹介していきます。

①【挨拶はコミュニケーション・対話の糸口⇒対話する基本的姿勢の獲得】

- 出会う人全てに自分から挨拶しましょう。先にすると気持ちいいです。
- 子どもの要求を最後まで聞き、子どもの目を見て語り掛けましょう。
- 返事をする際には、相手の目を見て伝わるようにはっきり返事をしましょう。
- 声のトーンや速度、イントネーション、顔の表情、仕草等も相手や場面に合わせて使い分けてみましょう。疲れている保護者の方には明るく、急いでいる人には事故がないように等。
- 挨拶に天気や時事ネタ、今日のファッション等々、一言加えるとなおいいでしょう。

②【安心を与えましょう⇒養護：情緒の安定、安心した生活が基本的信頼感を育むことの理解】

- 視野が広がってくると様々な子どもがいることに気づくはずです。中には甘え下手な子どももいます。淋しそうにしていたり、関わりを求めているにもかかわらず気づいてもらえない等の子どもにはさりげなく寄り添いましょう。
- その際に、周りに子どもがいればその子たちと関係を結ぶように関わりましょう。保育者はいつも見守っている存在であることを子どもたちが理解してゆく先に「安心の保育の場」が築かれるからです。

③【安全を守りましょう⇒養護：生命の保持、安全管理の重要性の理解、危機管理力の獲得】

- 子どもの命を預かるア 睡眠中、イ プール活動・水遊び、ウ 食事中の誤嚥、エ 玩具小物等誤飲、オ 食物アレルギーが、死亡事故等の重大事故の原因です。
- 内閣府から出されている「教育・保育施設等における事故防止及び事故発生時の対応のためのガイドライン（本ハートブックに参考資料として掲載）」等を参照して、さらに安全に対する行動を高めましょう。

④【生活場面の保育を学びましょう⇒生活場面における子どもへの関わりと環境構成の理解】

- 食事・睡眠・排泄・着脱・衛生・安全等の生活場面は、ゆっくりとした触れ合いや愛情を伝えるチャンスです。
- 遊び心を交えた関わりや子守り歌等で潤いを持たせ、関わりを深めましょう。
- 衣服の着脱等は「シャツの手を通すところまでを手伝い、頭を出すところは子どもに任せる」等、子どものやりたいこと、できそうなことから始め、ほめる機会を増やしましょう。
- 室内の環境構成では、季節感の感じられるもの、絵画や芸術的なもの、子どもの作品等々に着眼しましょう。保育者の意図や遊びの過程等について尋ねてみるのもいいでしょう。

⑤【環境整備の仕事を進んでしましょう⇒生活の成り立ちに必要な仕事への理解と参加・参画】

- 掃除・洗濯・整理整頓等の他にも保育材料や教材の準備、様々な行事の準備等、多種多様の仕事にチャレンジしましょう。
- 目的や用意・段取り・技術・配置の仕方等々について考察を深めましょう。

⑥【子ども主体の活動を広げましょう⇒子どもの興味・関心、主体性を活かす基本姿勢の獲得】

- 子どもの発達を大人側から一方的に捉えないようにしましょう。また、子どもの主体性を大事にして自ら大きくなったと実感できるよう関わりましょう。
- できる、できないよりも頑張っている姿や気持ちを見守りましょう。
- すべてを手伝わず、子どもの能力や可能性を信じ、さりげないサポートを心がけましょう。
- 泣いていたり、くじけそうになったり等の様々な葛藤と向き合っているときには、成長の機会と捉え、見守りましょう。

⑦【子どもとの関わりを様々に工夫し、試行錯誤を楽しみましょうⅠ⇒場面やねらいに応じた意図的な関わりの習得】

- 次の活動へつなげる⇒「ごはんがまっているよ」次の活動への見通し、「いいことあるかな」希望や期待感、また、子どもの行動を「待つ」等、「未来に向かう」関わり。
- 共感性を高める⇒「やったー、うれしい！」喜怒哀楽への受容・共感、「貸してほしかったんだ」気持ちの分かち合い、「一緒にやってみる？」協働する等の「今を共に歩く、生きる」関わり。
- 認める、自己肯定感を育む⇒「なるほど、考えて作ったからできたんだね」経験を認める、「見てたよ、何度もチャレンジしてたね」丁寧な見守り、活動の把握等、肯定感を育み、「体験や経験を認める」関わり。

⑧【子どもとの関わりを様々に工夫し、試行錯誤を楽しみましょうⅡ
⇒豊富な関わりによる保育センスの向上】

- 子どもは頭ではなく体と心が一体となって思考・行動します。場の楽しさを共有し、子どもの頃のように、一緒に、直観的に楽しみましょう。
- 子：「ぶっぶーぶっぶー」保：「発車～オーライ、いってきまーす」等、半歩、子どもの言動・活動が広がるような工夫をしましょう。
- 子どもは、友だちや保育者との相互作用によって世界を味わい、広め、深めていきます。子どもの自己決定を尊重しながらも、友だちとの関わりを促したり、一緒にしたり、考えたり、さりげなくヒントを与えたりしましょう。

⑨【保育環境の成り立ちと意図の理解に努めよう⇒環境を通して行う保育の習得】

- 遊びの環境構成には、生活体験から起こってきた「ままごと」等、運動体験から起こってきた「なわとび」等、人間関係から起こってきた「鬼ごっこ」等、表現活動から起こってきた「絵画・造形遊び」等、重層的に構成されています。
- また、子どもの継続的な遊びから生まれた環境、保育者が意図的に加えた環境が混在しています。
- 子どもの活動や表現によって「もの」と「もの」、「保育教材」、「自然素材」等が、どのように交わり、変化・展開し、新たな世界が現れるのか、楽しみに見守りましょう。

（イ）責任実習及び部分実習、指導計画の立て方

指導計画には年間・期・月・週・日等の種類があり、園ごとに様式や記入内容を工夫しています。指導計画を立てる際には、確認し、説明を聞きましょう。

- 部分実習や責任実習を行う場合は、活動内容について、園の方針や子どもの姿、季節等に合致したものになっているか、必ず担当者と相談の上、決定しましょう。
- 指導計画を立案する際にわからないことがあればどんどん尋ねましょう。
- 部分実習や責任実習では、担当者や配属先の保育者がサポートします。複数担任の一員の気持ちで事前準備や当日の段取りを行いましょう。
- 保育場面では、指導計画で予想した通りに子どもが活動しないことが普通です。思惑通りに進まなくても落ち着いて柔軟かつ臨機に取り組みましょう。

（ウ）実習の最後に

見て学ぶ、聞いて学ぶ、関わって学ぶ、書いて学ぶの連続でしたね。きっと様々な子どもの姿に触れたことでしょう。実習生にとって子どもの存在が大きかったように、子どもにとっても実習生の存在は大きかったはずです。あなたの膝に座り、あなたの腕で寝転び、あなたの笑顔に勇気づけられた子どもたちです。

振り返りではみなさんの進歩したところ、頑張ったところ、うまくいったところ、勇気や元気を出したところ、次につながるようなことを自己評価しましょう。

●実習振り返り会での学びを書きましょう。

5. 養成校での事後指導

実習で最も大切なことは、かけがえのないあなたの体験はもとより、子どもたちや先輩保育者との出会いを活かすことです。実習で経験した一つ一つの出来事を自分の中の大切な経験として、素晴らしく結晶させましょう。

そのためには、「まとめ」の作業と自分自身のこれからの「課題を設定する」作業を、じっくり、しっかり、行いましょう。事後学習で得た学びを学友と交換し、実習園へ伝えましょう。実習生の成長は、何よりも子どもたちにとって最高のプレゼントです。子どもたちの喜ぶ姿を想像してみてください。また、お会いしましょうね。



応援メッセージ

≪養成校の先生から≫

実習最後の日…子どもたちと離れるのが辛くて涙する方もいらっしゃるのではないでしょうか。

あなたとの出逢いから子どもたちもたくさんの元気をもらったことでしょうね。

大変なことも多かった実習期間…それでも、「責任をもって子どもと接する」ことの喜び、充実感…これは経験した者でないとわからない感覚だと思います。

資格取得後はぜひ保育の現場で働いてみて下さい。きっと、あなたと出逢える子どもは幸せです。

そのためにも、今回お世話になった配属クラス以外のところの環境構成や造形作品等も見せて頂いて資料化（写真等）しておくと役に立ちますよ。

≪園の先生から≫

実習を終えた今、実習簿のまとめはできましたか。やりきった充実感、思ったようにはならなかった悔い、いろんな思いが交錯していることと思います。

さて保育実践者にとって、「ふりかえり」の力はますます重要になっていきます。

自分で「ふりかえる」力、みんなで「ふりかえる」力を高めていくことが重要です。実習の「ふりかえり」はその第一歩です。

さあ明日のよりよい保育を共に創っていきましょう。

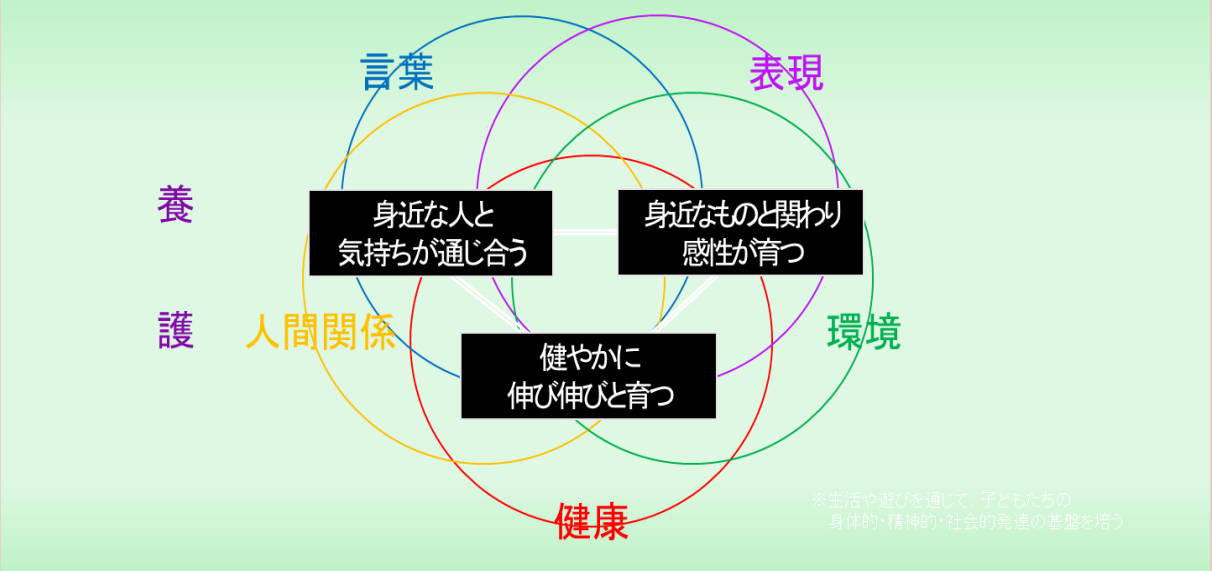


６．実践編

子どもたちとのすてきな出会い



乳児期の保育に関するねらい及び内容の３つの視点



厚生労働省　保育所保育指針の改定に関する議論のとりまとめ（平成 28 年 2 月 21 日）

身体的発達に関する視点	社会的発達に関する視点	精神的発達に関する視点
• 健やかに伸び伸びと育つ • 健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力の基礎を培う。	• 身近な人と気持ちが通じ合う • 受容的・応答的な関わりの下で、何かを伝えようとする意欲や身近な大人との信頼関係を育て、人と関わる力の基礎を培う。	• 身近なものと関わり感性が育つ • 身近な環境に興味や好奇心をもって関わり、感じたことや考えたことを表現する力の基礎を培う。

「ふわ～りふわり、おもしろい！」　　（０歳児）



（場面）

カラフルなフラワー紙をぎゅっと手で握ったり、くしゃくしゃにしたり、ちぎったりして遊びました。保育者が上からフラワー紙を落とすと、Sちゃんの頭の上からふわーりふわりとゆっくり降りていきました。S ちゃんは、フラワー紙を一枚一枚、目で追いました。何とも言えない嬉しそうな表情。上からふってくる紙の動きの面白さ、美しさ、不思議さ、心地よさを体全体で感じているようでした。保育者の目を見て笑顔、保育者も笑顔。やわらかい幸せな時間が流れました。

（発達と学びの視点）

健やかに伸び伸びと育つ　身近な人と気持ちが通じ合う　身近なものと関わり感性が育つ

一人一人の子どもの心に寄り添い、共感する、温かい触れ合いの中で、心と体の健康が育まれます。

「飲めたね！」　　（0 歳児）



（場面）

「のどかわいたね！」「お茶飲もうか？」の言葉かけに、Ａちゃんが初めてスプーンからお茶を飲みました。入園の日から、初めての場所や保育者に戸惑い、涙の日が続いていました。特定の保育者が微笑みながら抱っこし、優しく話しかけるといった愛情いっぱいの応答的な関わりをくり返すなかで、「飲めたね！」と喜びあふれる瞬間をむかえることができました。

（発達と学びの視点）

健やかに伸び伸びと育つ　身近な人と気持ちが通じ合う　身近なものと関わり感性が育つ

保育者との信頼関係により情緒が安定し、園での生活が楽しいものとなっていきます。

「はいはいでこんにちは」　　（０歳児）



（場面）

友達と一緒にはいはいをしてトンネルをくぐって遊んでいました。先にくぐったＧちゃんが後ろを振り返り、Ｓちゃんの顔をのぞきこんで、にっこり笑い合いました。

（発達と学びの視点）

健やかに伸び伸びと育つ　身近な人と気持ちが通じ合う　身近なものと関わり感性が育つ

０歳児は運動機能が著しく発達する時期で、子ども一人一人の発育・発達も様々です。安心できる保育者に見守られながら、はいはいをしたり、友達のことを気にかけて振り返ったり、まねをしたりして楽しい気持ちを共有しています。

「しゃぼん玉の不思議」　　（0 歳児）



（場面）

しゃぼん玉がふくらむのを遠くで見ていたＳ君。保育者が近づき、目の前でしゃぼん玉を吹くと、どこからしゃぼん玉が出てくるのかがわかったようで、ストローの先をじっと見つめていました。しゃぼん玉が大きく膨らむと手を伸ばし笑顔を見せました。この後、しゃぼん玉で遊ぶと、自分から近づいて触れようとする姿が増えました。

（発達と学びの視点）

健やかに伸び伸びと育つ　身近な人と気持ちが通じ合う　身近なものと関わり感性が育つ

「きれいだね。」「不思議だね。」と一緒に受け止めてくれる保育者に支えられて、興味をもったものに自分から関わり、遊びこむ経験を重ねて、子どもの認識する世界は豊かさを増していきます。

「回ってるね～」　　（0 歳児）



（場面）

天井に設置してある扇風機がクルクル回る様子に興味を持ち、指さしをして、保育者に伝えようとしていました。保育者は、「クルクル回っているね」と言葉を返し、一緒に扇風機を眺めました。

（発達と学びの視点）

健やかに伸び伸びと育つ　身近な人と気持ちが通じ合う　身近なものと関わり感性が育つ

まだ言葉は出ませんが、「指さし」は言葉への第一歩。発見を伝えたい子どもの想いに寄り添い、応答し、共感することで、好奇心が高まります。また言葉を獲得し、発語につながっていきます。

「初夏の園庭」　　（０歳児）



（場面）

初夏の園庭、年長児ががっちゃんポンプで水をくみ上げてくれ石臼の水受けにどんどん流れ落ちている所に、０歳児のＴ君が引き寄せられ石をよじ登り手をのばして水に触れています。入園間もない０歳児のＨちゃんも、この場で涙がとまりました。これがきっかけで、水遊びが大すきになったＴ君とＨちゃんでした。

（発達と学びの視点）

健やかに伸び伸びと育つ　身近な人と気持ちが通じ合う　身近なものと関わり感性が育つ

興味のあるものを見つけたことにより、それに向かう心と体が動き出しています。「保育園楽しい！！」の第一歩です。

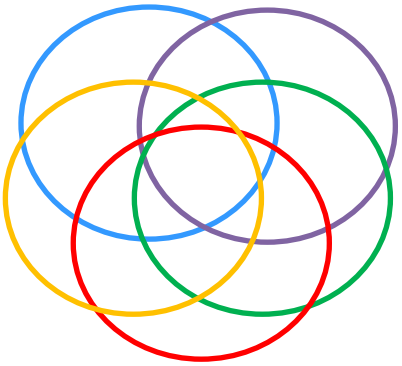
満１歳以上児の教育及び保育に関するねらい及び内容の５領域

経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う

言　葉

表　現

感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする



人間関係

他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う

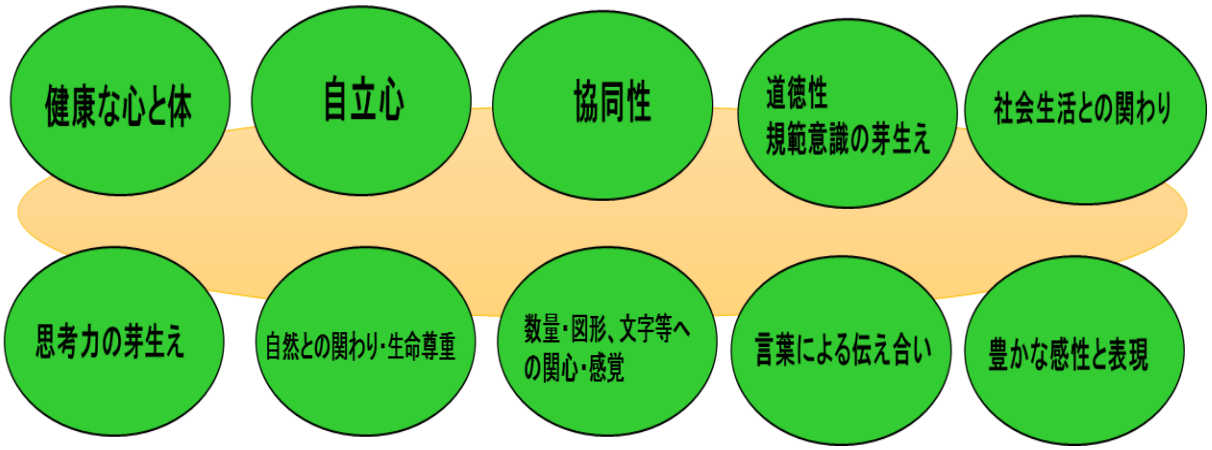
環　境

周囲の様々な環境に好奇心や探求心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う

健　康

健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活を作り出す力を養う

幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿



文部科学省　幼児教育部会における審議のとりまとめ（平成 28 年８月 26 日）

「かんぱーい！！」　　（１歳児）



（場面）

ままごとをしている時、コップを持って並んで座ったふたり。

保育者が「かんぱーいだね」と言うと、「ぱーい！」「ぱーい！」とふたりでコップをあわせてゴクゴク～と飲むまねを始めました。

（発達と学びの視点）

健　康　・　人間関係　・　環　境　・　言　葉　・　表　現

少しずつ、お友達と関わって楽しむ様子がみられるようになってきた１歳児。一緒に同じ動作をして、それを面白がって互いに顔を見合わせて「キャハハハ・・・」と笑う。こんな経験が、人と関わる力の基礎を培います。

「ひとりでできたよ」　　（１歳児）



（場面）

くだものの絵本を読んでから絵を描いたり、シールを貼ったりして遊んでいました。小さなシールを一人で上手に取れたことが嬉しくて、保育者や友達に「みてみてー」「とれたよ」と見せていました。

（発達と学びの視点）

健　康 ・ 人間関係 ・ 環　境 ・ 言　葉 ・ 表　現

一人でできた喜びを保育者に共感してもらうことで遊びへの意欲が高まり、より興味を持って活動することができます。「できた」の積み重ねにより、自己肯定感が高まり、学びに向かう力が育まれていきます。

「うわぁ～！お～い！」　　（１歳児）



（場面）

隣の部屋が見えるコーナーで、顔をのぞかせ、大好きな先生をみつけ、ちょっぴりおどけて大きな声を出して呼んでいます。はっきりとした言葉ではないけれど、「みて！みて！わたし、ここにいるよ～！」と、表現しています。こちら側には、「わぁ！びっくりした！ハーイ！！」と笑顔で応える保育者がいます。

（発達と学びの視点）

健　康　・　人間関係　・　環　境　・　言　葉　・　表　現

保育者の愛情豊かで受容的・応答的な関わりを通して、愛着関係が形成されます。普段の生活の中で、声をかけあったり、笑顔をかわしたりしているあいだに、自分が愛され、受け入れられ、認められていることを実感して、自己肯定感が育まれます。

「はい、どうぞ」　　（１歳児）



（場面）

持っている皿を「どうぞ」と渡すと、友達がスープを飲む真似をして「あっちっち」と言いました。友達の反応や言葉の響きが面白くて、何度も繰り返し遊んでいました。

（発達と学びの視点）

健　康　・　人間関係　・　環　境　・　言　葉　・　表　現

１歳になると、保育者との愛着をよりどころにして、少しずつ自分の世界を拡大していきます。友達への関心を持ち、一緒に生活したり遊んだりすることを通して、一緒に遊ぶことの楽しさや安心感を味わいます。こうした経験が人と関わる力の基礎を培っていきます。

「あ…だんごむし！」　　（１歳児）



（場面）

散歩で出かけた公園で見つけただんごむしを保育者が、そっと手の甲にのせました。「だんごむし、いたね～」「あるいてるね～」と言いながら、触ってみたくて伸ばした手を、やっぱりこわいのか、すぐに引いてしまいました。それでも、丸まったり、動く様子が面白くて、じっと見ていました。

（発達と学の視点）

健　康　・　人間関係　・　環　境　・　言　葉　・　表　現

身近な自然に触れ、見つけただんごむしを通して、親しみをもって観察するところから、自然に対する興味関心が深まっていきます。

「一緒にあそぼ！」　　（１歳児・５歳児）



（場面）

年長児が、砂や小枝で遊んでいた小さい友達を見つけ、「一緒に遊ぶ？これにも木さしていいよ！」と自分が遊んでい砂の入ったバケツを差し出しました。「こうしてやってみな？」と見本を見せ、それを真似する姿を見て「上手やなぁ！」と褒める姿がみられました。

（発達と学びの視点）

健　康　・　人間関係　・　環　境　・　言　葉　・　表　現

小さな友達に思いやりをもって接する、園生活の中でのワンシーンです。小さな友達は、優しくされた心地よさ・嬉しさ・温かさを感じ、人に対する思いやりや愛情を学んでいきます。

「ふわふわ　ふー」　　（２歳児）



（場面）

たんぽぽのわたげを見つけました。近くにいた子が「ぼくもほしい！」と言うと、「こっちにあるよ！」と教えてあげ、「一緒にふーしよう！」と言ってわたげを吹いて飛ばしていました。

（発達と学びの視点）

健　康　・　人間関係　・　環　境　・　言　葉　・　表　現

友達や保育者と関わるなかで、自分のしたいこと、してほしいことを言葉で表現できるようになってきます。また、一緒にという気持ちが芽生え、楽しいこと・嬉しいことを言葉で伝え合い、共感するようになってきます。

「何かな？」　　（２歳児）



（場面）

夕方の自由遊びの時、年中児が持ってきたカメに気付いた子がいました。すると、それまでの元気な声が静かになり、みんなで飼育ケースを囲み「みえたみえた！」「こっちむいとってや！」と声が聞こえてきました。

（発達と学びの視点）

健　康　・　人間関係　・　環　境　・　言　葉　・　表　現

生き物への好奇心をもち、感じたこと、気づいたことを伝え合っています。心を動かされた「もの」に向かう子どもたちの姿がそこにありました。実物に触れることで、その生き物のイメージが鮮明になり、具体的で豊かなものになっていきます。そして、やがて、生き物博士が登場します。

「友達がつくったラーメン　美味しい～！！」（2 歳児）



（場面）

ここは「ご飯屋さん」。右の A ちゃんがほおばっているのは「ラーメン」。麺のスズランテープは、子どもたちが手伝い、保育者と編んだもの。具材は子どもがキノコやニンジンに見立て丸めた新聞紙や広告紙です。真ん中の B ちゃんが麺や具材を丼に注ぎ、左の C ちゃんが「はい、どうぞ～」と A ちゃんにラーメンを手渡した瞬間、A ちゃんはとても美味しそうに食べ始めました。

（発達と学びの視点）

健　康 ・ 人間関係 ・ 環　境 ・ 言　葉 ・ 表　現

社会体験、手作りのプロセス、ごっこの役割分担などなど、遊びの隠し味が利いています。生活や遊びにおいて、人との関わりが充実する中で、話すこと、聞くことへの意欲が高まっていきます。

「み～つけた！」　　（２歳児）



（場面）

遠足でどんぐりや落ち葉を見つけると、拾ってじっくり見つめたり、たくさん集めたりすることに夢中になります。そして、「みて！おっきいどんぐり！」と発見を喜び合う姿がみられます。

（発達と学びの視点）

健　康　・　人間関係　・　環　境　・　言　葉　・　表　現

子どもたちは自然の中で遊ぶことが大好きです。自然の美しさや不思議さ・面白さに気づいたり、それを言葉で伝えたり、遊びに使ったりすることで、自然への興味・関心が深まります。

「あげはのさなぎの羽化がはじまりました」

（２歳児・３歳児・５歳児）



（場面）

いつ飛んでいってもいいようにフタを開けました。

園庭であそんでいた２歳児、３歳児、５歳児の子どもたちがテラスに駆け寄ってきて、息をころして見守ります。さなぎから出てきて細い足を動かし、枝に移りじっとして動きません！そのまま２０分ほどして、ふわっと飛んだ一瞬！みんな空を仰いでいました。

（発達と学びの視点）

健　康　・　人間関係　・　環　境　・　言　葉　・　表　現

じーっと眺める瞳の奥で「どうなるんだろう？」と心動かされる瞬間です。生命の不思議さや尊さに気づき、命の大切さを感じています。

「うわぁ～」　　（３歳児）



（場面）

Ｒちゃんは長くちぎった新聞紙を網戸にテープではり付け、遊び始めました。突然風がふき、はりつけた新聞紙が大きくなびくと、Ｒちゃんの表情が一変しました。

「うわぁ～！こいのぼりみたい！」

両手を前に突き出し、風を感じ、体いっぱいに受け止めます。

（発達と学びの視点）

健　康　・　人間関係　・　環　境　・　言　葉　・　表　現

肌で感じた心に響く体験が、小学校以降の学習で風速や風力を学ぶ時に思いだされ、つながり、単なる言葉や数値ではない体験に基づいた理解となるのです。

「お水！だぁいすき！」　　（３歳児）



（場面）

プールの中で「種まき･お花育てごっこ」が始まりました。「大きくなぁれ」と、水を沢山かけたら「わぁ！芽が出た」「花が咲いた！」と大はしゃぎ。夏の水遊びは、心も体も弾みます。

（発達と学びの視点）

健　康 ・ 人間関係 ・ 環　境 ・ 言　葉 ・ 表　現

季節や子どもの興味の広がりに添って展開される活動を通して、十分に体を動かし、活動意欲を満足させる体験を積み重ねることによって、心と体の調和のとれた発達が促されます。

「おばあちゃん、だいじょうぶ？」　　（３歳児）





（場面）

近くの山を散歩しているときのこと、大きな枯れ枝を発見したＡちゃんは小走りで枝を持つと「おばあちゃん」と言いながら杖のように突き、腰を曲げて歩きだしました。すると、近くにいたＢちゃんが「わたしお母さんよ、大丈夫？」と優しく語りかけ、腕を添えて歩くのを手伝い始めました。

（発達と学びの視点）

健　康 ・ 人間関係 ・ 環　境 ・ 言　葉 ・ 表　現

優しい場面を自然に再現する子どもの姿は、日常生活の大切さを表しています。このような人と関わる力を育てる上で、地域の高齢者と触れ合う体験を積極的にもつことも重要です。

「だいじな小枝が筆だから」　　（３歳児）





（場面）

散歩が大好きな子どもたち。山はまさに宝の山。花や木の葉に木の実、枝、石などなどポケットに入れた宝物を確認しながらの帰路です。Ａ ちゃんは小枝とどんぐりを拾って園に持ち帰りました。保育者はその様子を見てさりげなく絵の具を用意しました。丁寧に少しずつ色を付け描き始めるＡちゃんと、自分のことのように笑顔で見つめるＢちゃんです。

（発達と学びの視点）

健　康 ・ 人間関係 ・ 環　境 ・ 言　葉 ・ 表　現

小枝やドングリへの愛着の背景に散歩の愉しい風景が重なっています。素敵な体験があって、絵の世界・子どもの世界が広がっていきます。

「Ｙくんは、ここやぁ～ここ！」　　（３歳児）



（場面）

廊下壁に貼ってあるメジャーに集まり、

「立ってみて…Ｙちゃんは、ここやぁ～ここ」

と、メジャーを指さし、背比べが始まりました。一人を計ると、ボクも私もと自分の背の高さや友達との違いに興味を持ち、比べっこを楽しんでいました。

（発達と学びの視点）

健　康 ・ 人間関係 ・ 環　境 ・ 言　葉 ・ 表　現

好奇心旺盛な子どもたち！メジャーがあるという環境を通して、数えたり、比べたりする体験が生まれ、数字や数量に関心を持つようになります。

「へんしーん！ちゃきーん！！」　　（３歳児）



（場面）

厚紙で眼鏡を作ったＡ君は、つぎに腕時計を作りました。何とこの腕時計をはめると変身できるという代物です。作ったものを鼻にかけては「いぇーい！」、手にはめては「ちゃきーん！！」、１つを作ると思いつき、２つを作るとひらめいて、イメージの広がる方へどんどん変身していきます。その様子に爆笑の保育者。

（発達と学びの視点）

健　康 ・ 人間関係 ・ 環　境 ・ 言　葉 ・ 表　現

生き生きとした自由な発想が、子どもの数だけ生まれます。傍で見守る保育者が感心したり面白がったりすることで、さらに意欲が高まります。

「進め！ダンボール車！」　　（４歳児）



（場面）

段ボールを発見！「あっ！これ電車できるんちゃう？」「車もできるで！」「横立てられるなぁ！」とアイディアがとびだしてきました。言葉で思いや考えを伝え合いながらイメージを膨らませ、段ボール車が完成しました。

（発達と学びの視点）

健　康 ・ 人間関係 ・ 環　境 ・ 言　葉 ・ 表　現

意見がぶつかり合うこともありますが、友達の思いに気づき相手の思いも受け入れながら、工夫したり、協力したりして一緒に遊ぶ楽しさを味わいます。

「みんなに きてもらいたいねん！」　　（4 歳児）



（場面）

屋台の食べ物作りから「みんなにきてもらいたいねん」と、お店作りが始まりました。

「これ切るからはっていって！」「わかった。じゃあ、できたらいうな。」

自分の意見を伝えたり、友達と役割を分担したり、助け合いながらみんなで作り上げていきました。

（発達と学びの視点）

健　康 ・ 人間関係 ・ 環　境 ・ 言　葉 ・ 表　現

保育者や友達と一緒に行動したり、やり取りしたり、教え合ったりすることを通して、言葉とその意味を獲得していきます。

「コンサートごっこ」　　（４歳児）



（場面）

自分たちで振りを考えてダンスを楽しんでいた子どもたち。「なんかコンサートみたいやな！」と保育者が言ったひと言から「コンサートって何？」と興味をもち始めました。お客さんが座れるように椅子を並べたり、隣のクラスの保育者や友達を呼んできたりして、コンサートごっこが始まりました。「〇〇も作ろう！」と創作意欲も湧き、ペンライトや衣装、チケットなどのグッズも、コンサートが開催される度に増えていきました。

（発達と学びの視点）

健　康 ・ 人間関係 ・ 環　境 ・ 言　葉 ・ 表　現

友達と思いを伝え合うなかで、イメージを共有し、実現しようと工夫したり、協力したりする楽しい体験の中で、物事をやりとげようとする気持ちが育ちます。

「元気よくまわれ、風車」　　（４歳児）



（場面）

こいのぼりを作ると、風車を手で回したり、息を吹いて回したりしていました。遊戯室に行くと、風車が早く回るように、友達と一緒に元気いっぱい走り出しました。どのようにしたら風車が早く回るかを、友達と相談しながら、スピードを変えてみたり、手を高く上げ下げして持ち方を変えたりして、工夫する姿が見られました。

（発達と学びの視点）

健　康 ・ 人間関係 ・ 環　境 ・ 言　葉 ・ 表　現

感触を試し、楽しみ、興味を持って繰り返し関わる中で、次第にその性質や仕組みに気付き、遊びが深まっていきます。

「なか、どうなっとるん？」（４歳児）



（場面）

園庭の畑にはいろいろな種類のかぼちゃが大きくなっています。毎日収穫する子ども達から、「先生かぼちゃの中どうなってるのか、見たい」

「それなら、切って見てみようか」

「うわー！！」「固そうや」「ガリッて言ったで」「黄色いやん」「種がいっぱい入っとる」「食べたら美味しいの」

（発達と学びの視点）

健　康 ・ 人間関係 ・ 環　境 ・ 言　葉 ・ 表　現

栽培した食材を通した体験は、食べ物への関心を高め、意欲をもって食べようとする気持ちの芽生えに繋がります。

「ここに何か入りそう…そうだ！鳥の家になるな」

（４歳児）



（場面）

積み木遊びが進む中、木箱や蓋板を組み合わせていく子どもたち。すき間を覗き「何か入りそう…」「そうだ、鳥の家！」「こっちにも繋げよう」と、イメージは広がっていきます。

（発達と学びの視点）

健　康 ・ 人間関係 ・ 環　境 ・ 言　葉 ・ 表　現

一緒に楽しく遊んだり活動したりすることを通して友達関係が広がり、深まっていきます。人間関係が深まるにつれて、共通の願いや目的が生まれ、工夫したり、協力したりする楽しさを味わうことができるようになります。

「ここにもかける！」　　（４歳児・５歳児）



（場面）

机２台を使い、その上を養生シートでおおい、マジックで自由に描いて遊びました。描き心地や何を描いたかを、友達と話しながら進めるうちに、描く所が無くなり、テーブルの無いところにも描き始めました。Ｙちゃんが下からのぞき込み「こっちから見えるで～、あっ！こっちからも描けるやん」と、みんなで潜り込んで描いていました。

（発達と学びの視点）

健　康　・　人間関係　・　環　境　・　言　葉　・　表　現

様々な素材や表現の仕方を経験する中で、友達同士で一緒に表現する喜びを味わっています。

『協同性』『言葉による伝え合い』『豊かな感性と表現』

「色が変わったよ！」　　（５歳児）



（場面）

様々な廃材遊びを楽しむ中で、小さな厚紙とカラーペン、ペットボトルを使って作る色水遊びが始まりました。ペンの色を考えて作りたい色を作ったり、「５色混ぜるとどうなるかな？」と水を入れる瞬間に出る色に興味や関心を持ったりする姿がありました。一人の子が、色水を外の光にかざしてみると、色が違って見えることを発見！「わぁーすごい！」「やりたい！」と周りにいた友達にも広がりました。

（発達と学びの視点）

健　康　・　人間関係　・　環　境　・　言　葉　・　表　現

日常生活や遊びの中で興味や関心を持ち、「どうなるかな？」と試したり、考えたり、作ったりしながら探究心が育まれます。

『協同性』『思考力の芽生え』『豊かな感性と表現』

「どこへ行くのかな？」　　（５歳児）



（場面）

生き物当番を作って、飼い方を図鑑で調べて世話や観察をしてきた青虫が20羽ほどほぼ同時期にさなぎになり、そして、蝶になりました。

「かごの中はせまくて、かわいそう」

「そとにだしてあげよう」

と蓋を開けた瞬間、蝶が飛び出し、自由に舞う様子に夢中になっていました。

（発達と学びの視点）

健　康　・　人間関係　・　環　境　・　言　葉　・　表　現

小さな生き物の世話をすることを通して、その生き物に愛着を感じ、次第に生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする気持ちが育ちます。

『協同性』『道徳性の芽生え』『思考力の芽生え』『自然との関わり・生命尊重』

「窓は大きな画用紙！」　　（５歳児）



（場面）

毎日眺めていた大きなガラス窓が、何を描いてもいい大きな画用紙になりました。ぐっと握って描き始めたパスの線は、心のこもったとてもしっかりした線です。少し描くと、ふうっと息をはきます。真剣な時間が流れます。手の届くところを描きつくしたら、椅子や跳び箱・滑り台など踏み台になりそうなものを運んできて、高いところに描き始めました。

（発達と学びの視点）

健　康　・　人間関係　・　環　境　・　言　葉　・　表　現

新しい素材に触れる体験は、新鮮な喜びや集中力を生み、子どもは表現することの楽しさを体得していきます。

『協同性』『思考力の芽生え』『豊かな感性と表現』

「うわ～いきとる」　　（5 歳児）



（場面）

『私たちの町のいい所探そう！』と漁連や魚屋さんに出かけました。競り（せり）にかけられる直前の生きた魚や,イカやタコ、干物や加工された魚に触れ、匂いを嗅いで、普段食べている魚の姿を学びました。

「生きとる」「光って、つるつるしてる」「たこ動いてる」「こっちは乾かした魚？」「かわいそう・・・」

（発達と学びの視点）

健　康 ・ 人間関係 ・ 環　境 ・ 言　葉 ・ 表　現

本物に触れる体験は、子ども達の感性を思い切り刺激します。魚を通じて命の大切さを学んだ子どもたちは、意欲をもって、丁寧に食べることの大切さに気づくことでしょう。

『健康な心と体』『社会生活との関わり』『自然との関わり・生命尊重』

7. 参考資料

全国保育士会倫理綱領

すべての子どもは、豊かな愛情のなかで心身ともに健やかに育てられ、自ら伸びていく無限の可能性を持っています。

私たちは、子どもが現在(いま)を幸せに生活し、未来(あす)を生きる力を育てる保育の仕事に誇りと責任をもって、自らの人間性と専門性の向上に努め、一人ひとりの子どもを心から尊重し、次のことを行います。

私たちは、子どもの育ちを支えます。

私たちは、保護者の子育てを支えます。

私たちは、子どもと子育てにやさしい社会をつくります。

（子どもの最善の利益の尊重）

1．私たちは、一人ひとりの子どもの最善の利益を第一に考え、保育を通してその福祉を積極的に増進するよう努めます。

（子どもの発達保障）

2．私たちは、養護と教育が一体となった保育を通して、一人ひとりの子どもが心身ともに健康、安全で情緒の安定した生活ができる環境を用意し、生きる喜びと力を育むことを基本として、その健やかな育ちを支えます。

（保護者との協力）

3．私たちは、子どもと保護者のおかれた状況や意向を受けとめ、保護者とより良い協力関係を築きながら、子どもの育ちや子育てを支えます。

（プライバシーの保護）

4．私たちは、一人ひとりのプライバシーを保護するため、保育を通して知り得た個人の情報や秘密を守ります。

（チームワークと自己評価）

5．私たちは、職場におけるチームワークや、関係する他の専門機関との連携を大切にします。

また、自らの行う保育について、常に子どもの視点に立って自己評価を行い、保育の質の向上を図ります。

（利用者の代弁）

6．私たちは、日々の保育や子育て支援の活動を通して子どものニーズを受けとめ、子どもの立場に立ってそれを代弁します。

また、子育てをしているすべての保護者のニーズを受けとめ、それを代弁していくことも重要な役割と考え、行動します。

（地域の子育て支援）

7．私たちは、地域の人々や関係機関とともに子育てを支援し、そのネットワークにより、地域で子どもを育てる環境づくりに努めます。

（専門職としての責務）

8．私たちは、研修や自己研鑽を通して、常に自らの人間性と専門性の向上に努め、専門職としての責務を果たします。

社会福祉法人 全国社会福祉協議会・全国保育協議会・全国保育士会

平成 28 年３月内閣府　教育・保育施設等における事故防止及び事故発生時の対応のためのガイドライン

【事故防止のための取組み】～施設・事業者向け～より

〇はじめに

教育・保育施設や認可外保育施設等における子どもの死亡事故などの重大事故は、 残念ながら毎年発生しています。

日々の教育・保育においては、乳幼児の主体的な活動を尊重し、支援する必要があ り、子どもが成長していく過程で怪我が一切発生しないことは現実的には考えにくいものです。そうした中で、施設・事業所における事故（以下「事故」といいます。） 、 特に、死亡や重篤な事故とならないよう予防と事故後の適切な対応を行うことが重要です。

今回お示しする「教育・保育施設等における事故防止及び事故発生時の対応のため のガイドライン（以下「ガイドライン」といいます。）」は、死亡や重篤な事故への対応を念頭に置いています。

平成 27 年 4 月に施行された子ども・子育て支援新制度においては、「特定教育・保育施設及び特定地域型保育事業の運営に関する基準」（平成 26 年内閣府令第 39 号）第 32 条第 1 項第 1 号及び第 50 条の規定において、特定教育・保育施設及び特定地域 型保育事業者は、事故が発生した場合の対応等が記載された事故発生防止のための指針を整備することとされています。

これを踏まえ、特定教育・保育施設及び特定地域型保育事業、さらには認可外保育施設・事業も含め、施設・事業者、地方自治体が、それぞれの実情に応じて体制整備や教育・保育等を実施していくに当たって参考としていくものとして、このガイドラインを作成しました。ガイドラインに書かれている内容は、技術的な助言に相当するものです。

各施設・事業者、地方自治体においては、このガイドラインを参考として、それぞれの実情に応じて、具体的な指針等を策定し、教育・保育等を実施することが必要です。

このガイドラインは、事故の発生防止等のための取組みの第１歩となるものです。 今後、実際に施設・事業者、地方自治体が運用していく状況を踏まえ、引き続き見直しを行うべきものと考えています。

（注１）このガイドラインが念頭に置いている対象施設・事業は、特定教育・保育施設（確認を受けた認定こども園、幼稚園、保育所）、特定地域型保育事業（小規模保育、家庭的保育、居宅訪問型保育、事業所内保育）、地域子ども・子育て支援事業（子どもを預かる事業に限る。一時預かり事業、延長保育事業、病児保育事業）、認可外保育施設及び認可外の居宅訪問型保育事業です。

（注２）このガイドラインにおける「死亡事故等の重大事故」とは、死亡事故（SIDS（Sudden Infant Death Syndrome：乳幼児突然死症候群）や死因不明とされた事例も含む。）に加え、都道府県又は市町村において検証が必要と判断した事例（例えば、意識不明等）のことをいいます。

※本ガイドラインは、 「平成 27 年度教育・保育施設等の事故防止のためのガイドライン等に関する調査研究事業検討委員会」により作成されたものです

平成 28 年３月

〇目次

１ 事故の発生防止（予防）のための取組み

（１）安全な教育・保育環境を確保するための配慮点等・・・・・・・・１

（２）職員の資質の向上・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７

（３）緊急時の対応体制の確認・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８

（４）保護者や地域住民等、関係機関との連携・・・・・・・・・・・・９

（５）子どもや保護者への安全教育・・・・・・・・・・・・・・・・・９

（６）設備等の安全確保に関するチェックリスト・・・・・・・・・・・９

（７）事故の発生防止のための体制整備・・・・・・・・・・・・・・・９

２ 事故の再発防止のための取組み

（１）再発防止策の策定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

（２）職員等への周知徹底・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

1 事故の発生防止（予防）のための取組み

（1）安全な教育・保育環境を確保するための配慮点等　安全な教育・保育環境を確保するため、子どもの年齢（発達とそれに伴う危険 等）、 場所（保育室、園庭、トイレ、廊下などにおける危険等）、活動内容（遊具 遊びや活動に伴う危険等）に留意し、事故の発生防止に取り組む。特に、以下の ①で示すア～オの場面（**睡眠中、プール活動・水遊び中、食事中**等の場面）につ いては、重大事故が発生しやすいため注意事項を踏まえて対応する。

① 重大事故が発生しやすい場面ごとの注意事項について

ア 睡眠中

○ 乳児の窒息リスクの除去

以下の点を含む乳児の窒息リスクの除去を、睡眠前及び睡眠中に行う。

Point　窒息リスク除去の方法

- **医学的な理由で医師からうつぶせ寝をすすめられている場合以外は、乳児の顔が見える仰向けに寝かせることが重要。何よりも、一人にし ないこと、寝かせ方に配慮を行うこと、安全な睡眠環境を整えることは、窒息や誤飲、けがなどの事故を未然に防ぐことにつながる。**

- **やわらかい布団やぬいぐるみ等を使用しない。**

- **ヒモ、またはヒモ状のもの（例：よだれかけのヒモ、ふとんカバー の内側のヒモ、ベッドまわりのコード等）を置かない。**

- **口の中に異物がないか確認する。**

- **ミルクや食べたもの等の嘔吐物がないか確認する。**

- **子どもの数、職員の数に合わせ、定期的に子どもの呼吸・体位、睡 眠状態を点検すること等により、呼吸停止等の異常が発生した場合の 早期発見、重大事故の予防のための工夫をする。**

※他にも窒息のリスクがあることに気づいた場合には、留意点として記録し、施設・事業所内で共有する。

イ プール活動・水遊び

○ プール活動・水遊びを行う場合は、監視体制の空白が生じないように専ら監視を行う者とプール指導等を行う者を分けて配置し、また、その役割分担を明確にする。

○ 事故を未然に防止するため、プール活動に関わる職員に対して、子どものプール活動・水遊びの監視を行う際に見落としがちなリスクや注意すべきポイントについて事前教育を十分に行う。

Point　プール活動・水遊びの際に注意すべきポイント

- 監視者は監視に専念する。
- 監視エリア全域をくまなく監視する。
- 動かない子どもや不自然な動きをしている子どもを見つける。
- 規則的に目線を動かしながら監視する。
- 十分な監視体制の確保ができない場合については、プール活動の中止も選択肢とする。
- 時間的余裕をもってプール活動を行う。　等

○ 施設・事業者は、職員等に対し、心肺蘇生法を始めとした応急手当等及び119 番通報を含めた緊急事態への対応について教育の場を設け、緊急時の体制を整理し共有しておくとともに、緊急時にこれらの知識や技術を活用することができるように日常において実践的な訓練を行う。

ウ 誤嚥（食事中）

○ 職員は、子どもの食事に関する情報（咀嚼・嚥下機能や食行動の発達状況、喫食状況）について共有する。また、食事の前には、保護者から聞き取った内容も含めた当日の子どもの健康状態等について情報を共有する。

○ 子どもの年齢月齢によらず、普段食べている食材が窒息につながる可能性があることを認識して、食事の介助及び観察をする。

○ 食事の介助をする際の注意としては、以下のことなどが挙げられる。

Point　食事の介助をする際に注意すべきポイント

- ゆっくり落ち着いて食べることができるよう子どもの意志に合った タイミングで与える。
- 子どもの口に合った量で与える（一回で多くの量を詰めすぎない）。
- 食べ物を飲み込んだことを確認する（口の中に残っていないか注意する）。

- 汁物などの水分を適切に与える。
- 食事の提供中に驚かせない。
- 食事中に眠くなっていないか注意する。
- 正しく座っているか注意する。

○ 食事中に誤嚥が発生した場合、迅速な気付きと観察、救急対応が不可欠であることに留意し、施設・事業者の状況に応じた方法で、子ども（特に乳児）の食事の様子を観察する。特に食べている時には継続的に観察する。

○ 過去に、誤嚥、窒息などの事故が起きた食材（例：白玉風のだんご、丸のままのミニトマト等）は、誤嚥を引き起こす可能性について保護者に説明し、使用しないことが望ましい。

エ 誤嚥（玩具、小物等）

○ 口に入れると咽頭部や気管が詰まる等窒息の可能性のある大きさ、形状の玩具や物については、乳児のいる室内に置かないことや、手に触れない場所に置くこと等を徹底する。

○ 手先を使う遊びには、部品が外れない工夫をしたものを使用するとともに、その子どもの行動に合わせたものを与える。

○ 子どもが、誤嚥につながる物（例：髪ゴムの飾り、キーホルダー、ビー玉や石など）を身につけている場合もあり、これらの除去については、保護者を含めた協力を求める。

○ 窒息の危険性があった玩具やこれまでに窒息事例があるものと類似の形状の玩具等については、施設・事業所内で情報を共有し、除去することが望ましい。

オ 食物アレルギー

○ アレルギーについて施設・事業所での配慮が必要な場合、保護者から申し出てもらい、幼稚園等の学校においては学校生活管理指導表を、保育所においてはアレルギー疾患生活管理指導表を配付し、提出してもらう。食物の除去については、医師の診断に基づいた同表を基に対応を行い、完全除去を基本とする。

○ 主要原因食物である鶏卵、牛乳、小麦は安価で重要な栄養源であるため、食事の献立に組み込まれる傾向にあることから、主要原因食物に対する食物ア

レルギーの子どもが施設・事業所にいる場合、除去食又は代替食による対応が必要。

○ 施設・事業所では、家庭で摂ったことのない食物は基本的に与えないことが望ましい。また、家で摂ったことがある食物を与えたときであっても、新規に症状を誘発する場合があることから、食事後に子どもがぐったりしている等の場合、アナフィラキシーショックの可能性を疑い、必要に応じて救急搬送を行うことが望ましい。

○ 除去食、代替食の提供の際には、食事提供のプロセスである献立、調理、配膳①（調理室から食事を出すときの配膳）、配膳②（保育室等での食事を準備するときの配膳）、食事の提供という一連の行動において、どこで人的エラーが起きても誤食につながることに注意する。

○ 自らの施設・事業所において、人的エラーが発生する可能性がある場面を明らかにし、人的エラーを減らす方法や気づく方法のマニュアル化を図ることが望ましい。

（ア）食事提供の全過程の中で人的エラーが発生しそうになった事例、人的エラーが発生したがチェック体制により防ぐことができた事例を報告し、自らの施設・事業所で人的エラーが発生する可能性がある場面を明らかにする仕組みを作る。

（イ）上記（ア）で明らかになった「人的エラーが発生する可能性がある場面」の情報をもとに、それぞれの場面における人的エラーを減らす方法を共有する。

Point　人的エラーを減らす方法の例

・材料等の置き場所、調理する場所が紛らわしくないようにする。

・食物アレルギーの子どもの食事を調理する担当者を明確にする。

・材料を入れる容器、食物アレルギーの子どもに食事を提供する食器、 トレイの色や形を明確に変える。

・除去食、代替食は普通食と形や見た目が明らかに違うものにする。

・食事内容を記載した配膳カードを作成し、食物アレルギーの子どもの調理、配膳、食事の提供までの間に２重、３重のチェック体制をとる。

（ウ）上記（ア）で明らかになった場面のうち、特に重要な場面（例：調理室で代替食を調理する時、取り分けする時、ワゴンで調理室から他の職員に受け渡す時、保育室等で配膳する時）を決め、アレルギー表と現物等との突き合わせによる確認を行う。

○ 施設・事業者における食物アレルギーへの対応については、「保育所におけるアレルギー対応ガイドライン」（平成 23 年３月 厚生労働省）及び「学校給食における食物アレルギー対応指針」（平成 27 年３月 文 部科学省）を参考に取り組む。

・保育所におけるアレルギー対応ガイドライン
URL：http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/pdf/hoiku03.pdf

・学校給食における食物アレルギー対応指針
URL：http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2015/03/26/1355518_1.pdf

※食物アレルギーの子どもの食事提供の際の確認行動時、プール活動の際の監視時、子どもの移動等の際の人数確認時、睡眠の際の点検時などには、効果的な事故防止のために、声に出して指差し確認するなど確実な確認を実践する。

② 事故の発生防止に関する留意点
本ガイドラインを参考に、以下について留意の上点検等を実施する。

○ 事故の発生防止の活動
子どもの特性を十分に理解した上で、事故の発生防止に係る行動の確認や事故に発展する可能性のある問題点を把握し、事故の発生防止に取り組む。

○ 事故の発生防止に向けた環境づくり
事故の発生防止に向けた環境づくりには、職員間のコミュニケーション、情報の共有化、苦情（意見・要望）解決への取組み、安全教育が不可欠であることに留意する。

○ 日常的な点検
施設・事業者は、あらかじめ点検項目を明確にし、定期的に点検を実施した上で、文書として記録するとともに、その結果に基づいて、問題のある箇所の改善を行い、また、その結果を職員に周知して情報の共有化を図る。

○ 教育・保育中の安全管理について
教育・保育中の安全管理には、施設・事業所の環境整備が不可欠であることから、施設・事業者は随時環境整備に取り組む。

○ 重大事故の発生防止、予防のための組織的な取組みについて

重大事故の発生防止、予防については、ヒヤリハット報告の収集及び分析が活用できる場合もあるため、以下の取組みを行うことが考えられる。

ア 職員は、重大事故が発生するリスクがあった場面に関わった場合には、ヒヤリハット報告を作成し、施設・事業者に提出する。

イ 施設・事業者は、集められたヒヤリハット報告の中から、上記①のア ～オの重大事故が発生しやすい場面において、重大事故が発生するリスクに対しての要因分析を行い、事故防止対策を講じる。

ウ 施設・事業者は、事故防止対策について、下記（２）における研修を通じて職員に周知し、職員は、研修を踏まえて教育・保育の実施に当たる。

（２）職員の資質の向上

各施設・事業者においては、子どもの安全確保に関する研修に参加することを基本とするとともに、全ての職員は、救急対応（心肺蘇生法、気道内異物除去、AED・エピペンⓇの使用等）の実技講習、事故発生時の対処方法を身につける実践 的な研修を通じて、事故防止に係る職員の資質の向上に努める。

施設・事業所での研修や職員会議などの機会に、子どもの発育・発達と事故との関係、事故の生じやすい場所等を共有することで、事故への認識、危険に対する予知能力の向上を図る。

① 研修や訓練の内容

○ 施設・事業者自らが企画、立案し、消防等の関係機関、保護者等の協力を得ながら、各種訓練を計画的に実施する。

○ 上記「（１）安全な教育・保育環境を確保するための配慮点等」について、自らの施設等の保育環境を考慮して施設・事業所内で研修を実施する。

○ その際、「ガイドライン【事故防止のための取組み】～施設・事業者向 け～」や国及び地方自治体が行う再発防止に関する取組みを参考に、自らに適した取組みを行う。

○ 救急対応（心肺蘇生法、気道内異物除去、AED・エピペンⓇの使用等）について、実技講習を定期的に受講し、施設・事業者においても訓練を計画的に行う。

○ 119 番通報が円滑に行われるよう通報訓練を行う。その際、園庭での活動中、園外活動中、プールでの活動中等、場所や場面、職員の配置の状況を変え、実践的なものとなるよう工夫して実施する。

※119 番通報のポイントと伝えるべきことや役割分担については、下記「（３）緊急時の対応体制の確認」を参照する。

② 研修への参加の促進

○ 地方自治体等が実施する研修への参加については、積極的に対応する。

※公定価格には、代替要員等に係る経費が含まれていることを踏まえ、積極的に参加する。

※研修の参加費用について、地方自治体から補助が行われている場合があることも踏まえ、積極的に参加する。

○ インターネットで共有等されている事故予防に関する研修の動画等を活用する。

（3）緊急時の対応体制の確認

緊急時の対応体制として、以下のような準備をしておくことが望ましい。

① 緊急時の役割分担を決め、掲示する。

○ 事故発生時に他の職員に指示を出す役割について、施設長・事業所長、副施設長・副事業所長、主任保育士など、順位を付け明確にするとともに、事故発生時の役割ごとに分担と担当する順番・順位を決め、事務室の見やすい場所に掲示する。

○ 緊急時の役割分担の主なものは、以下が考えられる。

Point　緊急時の役割分担の例

・心肺蘇生、応急処置を行う。

・救急車を呼ぶ。

・病院に同行する。

・事故直後、事故に遭った子どもの保護者、地方自治体関係部署に連絡する。

・事故当日、事故に遭った子ども以外の子どもの教育・保育を行う。

・事故直後、交代で事故の記録を書くよう職員に指示する。

・施設・事業所全体の状況を把握しつつ、病院に同行している職員など、それぞれの役割の職員間の連絡をとる。

・事故当日、必要に応じて、事故に遭った子ども以外の子どもの保護者に事故の概要について説明をする。

・翌日以降の教育・保育の実施体制の確認を行う。

② 日常に準備しておくこと（受診医療機関のリスト、救急車の呼び方、受診時 の持ち物、通報先の順番・連絡先等を示した図等）について

○ 施設・事業者は、各職員の緊急連絡網、医療機関・関係機関（地方自治体、警察等）の一覧、保護者への連絡に関する緊急連絡先を事前に整理しておく。

○ 119 番通報のポイントと伝えるべきことを施設・事業者で作成し、事務室の見やすい場所に掲示、園外活動等の際に使用するかばんに携帯、プールでの活動中に見やすい場所等に掲示する。

（4）保護者や地域住民等、関係機関との連携 事故発生時の協力体制や連絡体制を整えるとともに関係づくりの必要性につ いて日頃から認識しておく。

○ 地域の人など職員以外の力を借り、子どもの安全を守る必要が生じる場合もあり、常日頃から地域とのコミュニケーションを積極的にとる。あわせて、いざという時の協力・援助を依頼しておくことについて検討する。

（5）子どもや保護者への安全教育

子どもや保護者に対する安全教育にも取り組むことが望ましい。

○ 子どもの発達や能力に応じた方法で、子ども自身が安全や危険を認識すること、事故発生時の約束事や行動の仕方について理解させるよう努める。

○ 家庭における保護者の行動や教育により、子どもが安全な生活習慣を身に付けることができるよう保護者と連携を図る。特に、上記「（1）安全な教育・保育環境を確保するための配慮点等」のうち①のプール活動・水遊び、誤嚥等の対応については、保護者の理解と連携が必要になることに留意する。

（6）設備等の安全確保に関するチェックリスト ］

施設内の設備について、年齢別のチェックリスト等を作成する等により定期的にチェックし、その結果に基づいて問題のある箇所の改善を行い、また、その結果を職員に周知して情報の共有化を図る。

（7）事故の発生防止のための体制整備

事故の発生防止は組織で対応することが重要であり、施設・事業所の長等のリーダーシップの下、組織的に対応できる体制を整備することとし、上記（1）～（6）の取組みに加え以下に取り組む。

① 重大事故の防止のための指針等を整備し、実践的な研修等を通じて全ての職員に周知する。

② 睡眠中、水遊び、食事中等の活動における危険の有無の確認や、万が一事故が発生した場合の検証ができるよう、必要に応じてビデオ等の記録機器の活用を検討する。

③ 以下の通知等（*）を参考に、事故の発生防止に取り組む。

Point　事故防止に係る通知等

＊「教育・保育施設等における事故防止及び事故発生時の対応のためのガイド ライン」（平成 28 年3月）

＊「特定教育・保育施設等における事故の報告等について」（平成 27 年2月 16 日付け府政共生 96 号、26 初幼教第 30 号、雇児保発 0216 第1号）

＊「水泳等の事故防止について」（ 平成 27 年5月1日付け 27 文科ス第 119 号）

＊「認定こども園においてプール活動・水遊びを行う場合の事故の防止につい て」（平成 27 年6月8日付け府子本第 157 号）

＊「児童福祉施設等においてプール活動・水遊びを行う場合の事故の防止につ いて」（平成 26 年6月 20 日付け雇児総発 0620 第1号）

＊「保育所及び認可外保育施設における事故防止の徹底等について」（平成 25 年1月 18 日付け事務連絡）

＊「保育所保育指針」（平成 20 年3月 28 日厚生労働省告示第 141 号）及び平 成 20 年3月「保育所保育指針解説書」（第5章 健康及び安全）

＊「保育所における感染症対策ガイドライン」（平成 24 年 11 月厚生労働省）
＊「保育所における食事の提供ガイドライン」（平成 24 年3月厚生労働省）

＊「保育所におけるアレルギー対応ガイドライン」（平成 23 年3月厚生労働省）

＊「教育・保育施設等における重大事故防止策を考える有識者会議（仮称）」 による再発防止の取組み

２ 事故の再発防止のための取組み

施設・事業者及び地方自治体は、死亡事故等の重大事故が発生した場合に事故後 の検証を行った上で、これまでの取組みについて改善すべき点を検討し、重大事故 の再発防止の取組みについて、以下に留意し実施する。

（1）再発防止策の策定
○ 「ガイドライン【事故発生時の対応】」の（8）の事故後の検証を踏まえ

て、既に発生した事故が防げるものだったのか、今後、類似事故の発生防止のために何をすべきか、という視点で具体的に再発防止策の検討を行う。

○ 策定した再発防止策については、既存の指針等に確実に反映させるとともに、その後の取り組み状況に応じて、随時見直しを図る。

（2）職員等への周知徹底

○ 発生した事故について、再発防止策を職員全員に周知するとともに必要に応じて保護者とも共有を行う。

※参考事例を参照したい方は、下記 URL よりご覧ください。
https://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/meeting/kyouiku_hoiku/pdf/guideline1.pdf

８．あとがき・・・保育への思いをハートブックに込めて

「子どもを育むように実習生を育みたいなぁ」、「子どもの育ちは保育者自身の育ちですよね」、「自分自身がもっと保育を理解して実習生にうまく伝えたい」等々の保育者の言葉があった。

「養成校と園が協働して、保育者養成の研究をさらに深めていきたい」、「就職後の保育者の育成に向けてもっと本質的な連携をしよう」、「園の関係者と養成校の教員が本音で語り合う場があるといいよね」等と熱く語る養成校の先生の姿があった。

ところで、実習指導というと、いつも課題として浮上することのひとつに養成校や園による指導内容の差異があった。

そこで、本ハートブックの作成にあたっては、京都府・市の多くの園が会員として組織する京都府保育協会及び京都市保育園連盟と両組織が全国に先駆けて実施するに至った京都式キャリアパス保育研修の立ち上げや講師等として多大な尽力をいただいている京都保育士養成研究会の三者が協働し、その実践研究の一環として行うこととした。

また、平成 28 年３月に全国社会福祉協議会より示されている「第三者評価共通評価基準ガイドラインにおける各評価項目の判断基準に関する ガイドライン　判断基準、評価の着眼点、評価基準の考え方と評価の留意点　（保育所解説版）」における評価項目**「Ⅱ-2-(4) 実習生等の福祉サービスに関わる専門職の研修・育成が適切に行われている。」**への組織的な対応を意識した。

これにより、一つでも多くの養成校と園が本ハートブックを活用し、先述の養成校や園による指導内容の差異の軽減と共通の土台から指導を充実させていく道程を考慮した。

参考までに、評価項目の目的、評価の留意点、評価の着眼点をつぎに示す。

【目的】

- 本評価基準は、実習生等の福祉サービスに関わる専門職の研修・育成について基本的な姿勢を明確にした体制を整備し、効果的なプログラムを用意するなど、積極的な取組を実施しているか評価します。

【評価の留意点】

- 受入れ体制の整備については、受入れに関するマニュアルの作成が求められます。マニュアルには、受入れについての連絡窓口、利用者や家族等への事前説明、職員への事前説明、実習生等に対するオリエンテーションの実施方法等の項目が記載されている必要があります。
- 実習生等の受入れについて、組織として具体的にどのような取組を行っているかについて評価します。事前説明の方法や、実習生等を忌避する利用者への配慮等につ

いて聴取します。

- 効果的な研修・育成のための工夫がなされているか確認します。具体的には、①実習 （教育・研修）内容全般を計画的に学べるようなプログラムを策定する、②実施状況に関す る連絡等についての学校等（教育・研修の実施主体・派遣機関等）との連携を強めるための 取組を行う、③実習生等の目的や職種等に考慮したプログラムを用意する、④これらが職員 に周知され共有されていること、などが考えられます。

【評価の着眼点】

- 実習生については、学校側と、実習内容について連携してプログラムを整備するとともに、実習期間中においても継続的な連携を維持していくための工夫を行っている。

さて、本ハートブックは二部構成になっている。前編は実習をより豊かにあたたかに実りあるものにするための実習プログラムであり、保育者の使用を見据えた実習指導マニュアル及び初任者の育成プログラムでもある。

後編は保育の写真を活用し、簡単なコメントを加え実践記録風に仕上げた。生き生きとした子どもや実践の風景から、保育の魅力を少しでも高めてもらい、より良い保育者を志す動機になることを願う。写真の活用は保育のドキュメンテーションあるいはポートフォリオと呼ばれ、子どもの姿や活動を省察し、子どもの興味や関心、あるいは願いからその実現に向かう「子ども主体の保育の展開」の最も効果的な記録方法の一つとして注目されている。是非、各園での実践集として充実を図り、養成校の授業や実践研究に繋げていただければと願う。

思いをバトンにつなぐハートブックである。その心は、子どもを真ん中において、実習生＝保育者＝養成校教員のそれぞれが相互主体的に自己を成長させていくことであり、園と養成校の互恵的関係の先に、子ども・人間の豊かな未来を描きつづけていくことにほかならない。

本ハートブックの目的は、完成ではなくプロセスにある。自由に加筆・修正して各園・各校からの英知を結集する一助になれば幸いである。

作成にご尽力いただいた京都府保育協会、京都市保育園連盟並びに京都保育士養成校研究会の関係者のみなさまと今日まで保育を拓き、情熱を捧げ、バトンを渡してくださった先達とのご縁に心からの感謝を申し上げ、結びの言葉とする。

令和元年６月１日

(一社)京都府保育協会・(公社)京都市保育園連盟・京都保育士養成研究会

参考文献・資料
保育所保育指針解説（2018）厚生労働省
幼保連携型認定こども園　教育・保育要領解説（2018）内閣府・文部科学省・厚生労働省

実習ハートブック（非売品）
発行年　令和元年6月1日
編　集　一般社団法人京都府保育協会・公益社団法人京都市保育園連盟
　　京都保育士養成研究会
表紙イラスト　寺井　遥（京都造形芸術大学）
※本書を営利を目的として、無断複写することは禁じます。